



平成27年3月23日発行

発行者
公益社団法人 新潟県植物防疫協会
〒951-8133
新潟市中央区川岸町三丁目21番地3
☎ 025 (233) 2839
FAX 025 (233) 8018

《主 な 内 容》

- キウイフルーツかいよう病 Psa3系統のまん延防止について … 1
- 新潟県におけるクモヘリカメムシの発消長と分布地域について … 2
- マイマイガの大発生に注意 …………… 3
- 平成26年度 水稲・大豆主要病害虫の発生概況 …………… 4
- 平成26年度 水稲病害虫防除事業及び病害虫地域予察強化事業の概要について … 5
- 水稲の無人ヘリコプターによる共同防除の安全対策について … 6

キウイフルーツかいよう病 Psa3系統 のまん延防止について(ストップ Psa3!)

1 キウイフルーツかいよう病Psa3系統について

キウイフルーツかいよう病は、細菌病のひとつで、これまで日本ではPsa1（従来系統）のみの存在が確認されていました。

Psa3系統はPsa1系統に比べ、強い病原力を有し、感染すると枝や新梢の傷口から白色～赤褐色で粘質の細菌液が漏出し、枝や新梢が萎縮・枯死します。また、葉では褐色斑点の病斑を形成し、病徴が著しい場合は落葉してしまい、最悪の場合、樹体が枯死する事例も報告されています。

本病害は雨やせん定鋏等の作業器具、接ぎ木することで感染すると見られています。

感染した枝や葉は本病の伝染源となるため除去し、埋設又は焼却により処分します。また、病徴が著しい感染樹は伐採する必要があります。

なお、人や動物に感染することはありませんので、果実を食べても健康に影響はありません。



被害葉（愛媛県提供）



樹液の漏出（愛媛県提供）



新梢の枯死（愛媛県提供）

2 日本国内でのPsa3系統の発生状況

日本では、2014年5月に初めてPsa3系統の感染が確認されました。その後、西日本を中心に8県の生産園地で、Psa3系統に感染したキウイフルーツ樹が確認されています（H27年2月現在）。

なお、県内ではこれまで、Psa3系統感染樹は確認されていません。

3 本県での進入警戒調査の概要

Psa3系統の感染が広がると、キウイフルーツ生産に重大な被害を及ぼす恐れがあります。このため、農林水産省と都道府県が協力して、全国で発生調査を行うとともに、発生県においては感染樹の処分等感染拡大防止に取り組んでいます。

新潟県においても、植物防疫所や関係者の協力の下、キウイフルーツの各産地は場の調査を行っており、Psa3系統の進入警戒に努めています。



ほ場調査風景

4 仮に感染の可能性のある樹を発見したら？

Psa3系統は感染を早期に発見し、速やかに対策を図ることが重要です。写真のような感染の疑いのある樹を発見した場合には、速やかに下記に連絡するようお願いいたします。

横浜植物防疫所新潟支所 025-244-4401

新潟県病害虫防除所 0258-35-0867

【参考】農林水産省ホームページ

<http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/index.html>

（新潟県農林水産部農産園芸課 渡邊 嘉顕）

新潟県におけるクモヘリカメムシの発生消長と分布地域について

1 はじめに

クモヘリカメムシは関東以南では主要な斑点米カメムシで、新潟県では平成9年頃から発生が確認されるようになりました。成虫の体長は15～17mm、若齢幼虫も肉眼で確認できる比較的大型な斑点米カメムシです。大型であることや、独特な臭いを放つことから種の判断が容易な斑点米カメムシです。



写真 クモヘリカメムシの成虫（上）と幼虫（下、1～5 齢幼虫）

2 新潟県における発生消長

クモヘリカメムシは成虫で越冬し、越冬場所は山林でスギ、ヒノキ等の枝葉や下草のシダ類の葉と考えられています。水田周辺の雑草地において、6月下旬頃から越冬後成虫が出現し、その後1～2世代経過し、越冬場所へ移動すると推定されます。水田では、主にイネの出穂を契機に成虫が飛来・侵入し、イネの葉や穂に産卵し、その後幼虫が発生します。

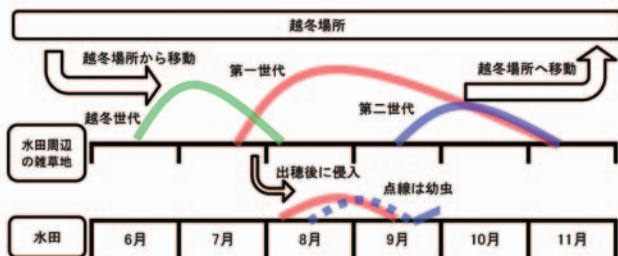


図 新潟県におけるクモヘリカメムシの発生消長の模式図(推定含む)

成虫、幼虫ともにイネの籾を吸汁加害し、登熟初期の加害は玄米の発育を著しく阻害するため、斑点米としての被害は主に登熟後期の加害によるものと考えられています。また、メヒシバ、エノコログサ、ノビエといったイネ科雑草が出穂している雑草地で幼成虫の発生が多いことから、水田周辺の雑草地や水田内でイネ科雑草が出穂しないように管理し、カメムシの密度を高めないことが重要です。

3 新潟県での分布地域

クモヘリカメムシは、新潟県でも佐渡島や本州沿岸部の比較的山林が近くにある場所で確認されており、一部地域では定着しているものと思われます。このクモヘリカメムシの分布域には1月下旬の最高気温が影響すると報告され

ており（福島県農業総合センター平成20年度研究成果（参考となる成果）、新潟県で確認された地域もこの時期の最高気温が比較的高い地域です。本県においてクモヘリカメムシの分布に影響するもう一つの要因として、積雪量が考えられます。したがって積雪量とクモヘリカメムシの分布や発生量の関係について、今後検討していく必要があると考えます。

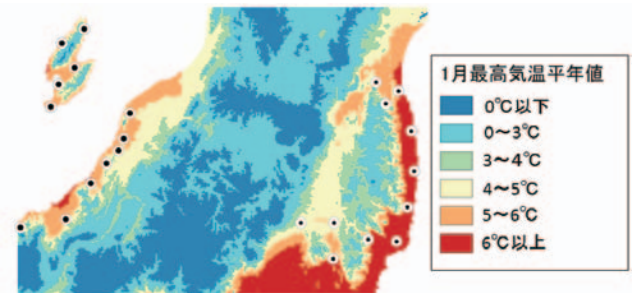


図 新潟県におけるクモヘリカメムシ確認地点

注）1月最高気温年平値は国土交通省国土数値情報（年平値1kmメッシュデータ）から作成した。

新潟県のプロットは平成20年以降に新潟県病害虫防除所および作物研究センターの調査でクモヘリカメムシが確認された地点。同じ地域で複数地点確認されている場合は代表的な地点だけプロットした。

福島県、宮城県のプロットは福島県農業総合センター平成20年度研究成果を基に作図した（参考）。

4 さいごに

新潟県全体では、クモヘリカメムシが確認される地域はごく一部で、その密度は他の斑点米カメムシと比べて低い状況です。しかし、一部地域では定着していると思われることや、確認地点が増加する傾向にあることから、発生量や発生地域の動向には引き続き注意が必要です。

（作物研究センター 栽培科 岩田 大介）

植防一口メモ

えだまめ栽培における ダイズシストセンチュウ対策について

畑作地のえだまめの栽培では、ダイズシストセンチュウの被害が大きな問題となります。

ダイズシストセンチュウはシストの状態では10年以上も生存できるといわれ、えだまめ栽培されることで孵化し、根へ寄生します。センチュウ密度が高まると、えだまめの葉が黄化し著しい生育不良となります。

一番の防除対策は発生は場から未発生は場にダイズシストセンチュウを持ち込まないことです。は場間の移動の際は、トラクタの作業機やタイヤを洗い、長靴もよく洗うようにしましょう。

えだまめの抵抗性品種も出ているようですが、緑肥との輪作体系をとることも有効な手段です。現地ではえだまめ2年に緑肥1年の輪作体系を実施しています。緑肥の中でも有効なのがマメ科のクロタラリアです。6～7月中旬頃、6～9kg/10aを目安に散播し、花が咲き終わった頃に場にすき込みます。無理な早まきや遅まきは植物体が十分に成長しないので効果が劣ります。積雪地では年内にすき込むのではなく、雪解け後は場が乾いた時点ですき込み作業を行うと、分解が速く耕うんが楽になります。

（十日町地域振興局農業振興部 岸田 涼子）

マイマイガの大発生に注意

1 平成26年の発生状況

園芸研究センターの予察灯でマイマイガ（別名ブランコケムシ）が過去最多の誘殺数となりました（図1）。岐阜県や長野県で発生予察注意報が発表され、上越市、魚沼市、新発田市などでも多発生の情報があり、全県的に多発生であったと思われます。本種は2、3年間は多発生が続き、多種類の植物を食害することから、平成27年も多発生に注意が必要です。

2 マイマイガの生態

卵（卵塊）で越冬し、年1回発生します。前年夏に樹幹や家屋の外壁などに生み付けられた卵から4月下旬頃に幼虫がふ化します。ふ化幼虫は、黒褐色の毛虫で、糸を吐いて風に乗るなどによって移動し、餌植物に到達します。多種類の植物を食害し、「サクラ」・「フジ」・「ケヤキ」等の落葉広葉樹を好みます。日本農業害虫大事典（全国農村教育協会、2003）に加害種として記載のある項目は「ダイズ」、「カキ」、「ハスカップ」、「ウメ・アズミ」、「オウトウ」、「ナシ類」、「モモ・スモモ」、「リンゴ」、「クリ」、「ヤマモモ」、「イネ科牧草」、「バラ類」、「カエデ類」、「ザクロ・サルスベリ」、「サングジュ」、「サクラ類」および「カシ類」と、極めて多数です。幼虫は成長につれ、背面に黄色・橙色の斑紋や青色・赤色の瘤が目立つようになり、歩行や糸で下垂するなどして（ブランコケムシの名の由来）、移動・分散します。6月下旬～7月上旬に蛹に達し、7月中旬～8月上旬に羽化します。多発生時には、夜、街灯に成虫が多数飛来する姿がみられます。夏に発生した成虫は、交尾後間もなく産卵し、卵はそのまま越冬します。



成熟した幼虫

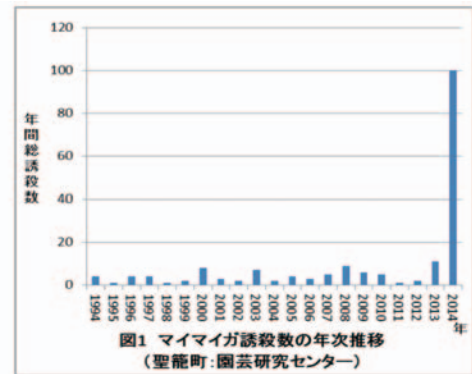


建物の外壁に産卵した♀成虫

3 近年の多発生事例

平成20～22年に、佐渡地域の雑木林や樹園地などで多発生しました。特に平成21年は、山林で多発生した幼虫が隣接する「かき」園や畑地、水田に侵入し、一部で被害が出ました。多発生対応の事例として「かき」などでの経過（佐渡農業普及指導センター・病害虫防除所の調査）を報告します。

- (1) かき：ふ化期に周辺の山林・雑木林から風に乗って移動・分散するのが一般的ですが、多発生時には中齢幼虫期以降に周囲の雑木が食い尽くされて歩行侵入する場合があります。平成21年は、5月防除の遅れや、2次的な侵入により一部の園で被害が発生しました。



- (2) イネ：平成21年には、山林に隣接した谷筋の一部水田で幼虫の侵入・加害が見られました。山林で多発生した幼虫が餌を求めて水田に侵入したり、水路に流されて水口から流れ込んだものです。イネで本種の登録農薬はないので耕種的な対策を講じます。草刈りが幼虫を水田内に追い込むこともあるので、畦畔・農道に幼虫が多い場合には、蛹となる7月上旬ごろまで草刈りの延期を検討します。また、水口からの流入に対しては、仕切網などを設置し、流れ着いた幼虫を集めて処分する措置が考えられます。

4 おわりに

本種の増加の要因はよく分かっていませんが、突発的に多発生となり、2、3年で病気の蔓延により収束することが知られています。平成26年の予察灯調査で過去最多となっていることから、平成27年は通常では問題にならない作物での被害も懸念されます。特に山林・雑木林に隣接した畑では十分な注意・観察が必要です。老齢幼虫には殺虫剤の効果も低下するため、ほ場をよく観察し幼虫の多発生を見つけたら早めの対応が必要です。

(園芸研究センター環境・施設科 堀川 拓末)

みちくさ 佐渡での1年を終えるにあたり

佐渡に着任して3か月ほど経った頃のことです。休暇を利用して南魚沼の実家に泊まったあと、帰りのフェリーがもうすぐ姫崎灯台に近づこうとするころ、デッキから島の夕景を見ながら、不意にある思いにとらわれました。

「この島は沖縄の次に大きな島、人口も六万人に近い。水田面積は6000haを超える。その中で水稻大豆の栽培試験だけやっていればいい（極端な表現ですが）立場の人間は自分だけなのだ」と。恥ずかしながら非常にプレッシャーを感じ、落ち込みました。

はたして自分にそれに値する能力や知見があるかどうか。試験は場以外にも現地を知り、農業者や関係機関の皆さんとしっかり意思疎通を図り、研究業務に活かしてきただろうか。

もうすぐ着任1年ですが、1年目の反省点や日々の仕事の中で気付かされたことを疎かにせず、2年目の職務に活かしていきたいと考えています。

(佐渡農技センター 中嶋 健一)

平成26年度 水稲・大豆主要病害虫の発生概況

1 水稲の病害虫

(1) いもち病

本田における葉いもちの初確認は6月26日で平年（6月24日）並でした。7月第1半旬頃から中越地域を中心に発生が認められましたが、各地で発病が認められるようになったのは7月第5半旬とやや遅く、発生量は平年並となりました。

8月上旬には、他の地域に比べて早くから発病ほ場が散見された中越地域で平年比多い発生量となりましたが、その他の地域ではやや少ない～平年並の発生量となっています。コシヒカリBLの発病は少なく、多発事例は多収品種の一部で確認された程度でした。

穂いもちは、早生品種、コシヒカリとも出穂期頃の降雨日数は少なめで、全般には平年並に少ない発生となりました。ただし、今年度の特徴としては、8月16日～17日に県内広域で感染に好適な気象となり、9月上旬に穂首や枝梗いもちの稀～少発生がほとんどのほ場で認められる現象が観察されました。穂いもちの中～多発生事例は、長岡市（わたぼうし）、阿賀野市（こがねもち）、魚沼市（コシヒカリBL）などで認められましたが、全般に少なめとなっています。

(2) 紋枯病

紋枯病は近年増加傾向と考えられます。初確認は7月7日で、平年（6月28日）に比べて遅く、7月下旬から各地で発生が確認されはじめました。8月上旬までは平年に比べてやや少ない発生でしたが、出穂期以降発病進展が目立ち、9月上旬に発生量は平年比やや多となりました。上越、魚沼、下越地域では平年比多となり、一部に中発生ほ場も認められましたが、発病程度は全般に軽度で、被害が問題となったほ場はほとんどありませんでした。

(3) ごま葉枯病

ごま葉枯病は近年、下越地域を中心に県内全域で発生が目立っています。

初確認は6月23日で、三条市飯田（こがねもち）の補植用置苗に病斑が認められました。7月上旬には罹病苗を移植したと思われる株に多数の小型病斑が形成され、その株の周囲数株が坪状に発病している状態が観察されています。

発病進展は例年に比べて早い傾向で、8月上旬には発生面積の急速な増加がみられ発生量は平年比多となりました。

9月上旬になると各地で中発生ほ場が散見され、下越地域の常発地では多～甚発生ほ場も認められました。発生地点率は96%と極めて高い状態で、穂枯れ症状は各地で前年同様に目立ちました。

(4) 斑点米カメムシ類

加害種別では、シラホシカメムシ類の畦畔確認地点率はやや高めで、出穂期後の水田内発生はほぼ平年並でした。アカヒゲホソミドリカスミカメは第1世代成虫の発生時期にあたる6月後半～7月前半の発生量が畦畔・水田内とも顕著に多くなりました。出穂期後は主に8月前半～後半の密

度が高く、全般に平年より多い発生となりました。アカスジカスミカメは下越・魚沼・中越地域を中心に畦畔での確認地点率が高めで、水田内発生は下越・新潟・中越地域の密度が高く、出穂期後の発生は県全体で平年比多く、特に8月後半の密度増加は顕著でした。

12月末現在の斑点米による格落ち率は、全品種で1.72%と平年（1.05%）に比べて高く、地域別では新潟・魚沼・佐渡が平年の2倍以上の被害程度で多く、中越・上越地域が平年比やや多、下越地域は平年並となりました。品種別ではコシヒカリの格落ち率が1.38%と平年比多く、地域別では下越を除く5地域で前年より格落ち率が増加しています。特に佐渡地域の被害程度が顕著で、今まで被害の少なかった新潟中越地域で急増しています。

平成12年以降、カスミカメムシ2種の発生が斑点米の発生に大きく関与していると推測され、特に、ここ2,3年は両種の複合的な加害で被害が増加したと考えられます。

(5) その他の病害虫

育苗期の病害は平年より目立つ発生はありませんでしたが、ばか苗病の本田での発生が平年よりやや多い傾向がみられました。

稲こうじ病は、新潟市で多発生ほ場が認められましたが平年並の発生でした。墨黒穂病は中越地域のわたぼうし等でやや目立つほ場が認められました。いずれも農産物検査規格外米の発生は近年比少でした。

害虫では、ニカメイチュウは第1世代虫による被害が、下越・佐渡地域でやや目立ちましたが、全般にはほぼ平年並で経過し、第2世代虫は被害が目立つ地域はなく、平年比やや少～並でした。また、セジロウンカは初飛来が7月8日と平年比遅く（平年6月26日、前年6月20日）、その後も数回の再飛来があったとみられますが、いずれも飛来量は少なく、7月下旬～9月上旬の発生量は全般に平年比やや少ない～少ないまま経過しました。

2 大豆の病害虫

(1) 病害

昨年発生の多かった立枯性病害は平年並の発生で、黒根腐病は県内全域で発生し、茎疫病が7月の豪雨によって浸・冠水したほ場を中心に目立ちました。べと病の葉の発生は平年並でしたが、被害粒は多く、全域で確認されています。その他の子実病害では紫斑病は平年より少なく、褐斑粒はやや多の発生となっています。

(2) 虫害

7月下旬から8月上旬の気象が高温少雨で経過したこともあり、ハダニ類の寄生が多く確認されましたが、その他は平年並～やや少なく、特に問題となる発生はみられませんでした。子実害虫による被害粒の発生は全般に平年並～やや少でしたが、マメシクイガの被害粒が一部連作ほ場で多くなっています。

（新潟県病害虫防除所 小池 利幸）

平成26年度 水稻病虫害防除事業及び病虫害地域予察強化事業の概要について

【はじめに】

平成26年産水稻は、7月上旬の梅雨前線の停滞による豪雨により土砂流入や冠水、8月9日から11日の台風第11号の影響による強風やフェーン現象により白穂や変色稲が発生し、県内各地において大きな被害が発生しました。農林統計の作況指数は県全体で101となり、コシヒカリの1等米比率は、85%と前年度よりは大幅に改善されましたが、地域間では1等米比率の差がありました。県下NOSAI団体では、無人ヘリコプター等による共同防除活動を通じて、新潟米の品質向上に協力しています。

本年度の水稻共同防除は、8月に天候が不安定となり、一部で防除日程の変更もありましたが、概ね予定どおりの防除が実施されました。7月16日には、カメムシ類による斑点米の多発生注意報が出され被害が心配されましたが、一斉防除効果によって被害の拡大を抑えることができたものと推察いたします。関係者のご尽力に深く感謝申し上げます。

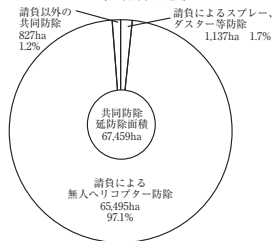
【水稻病虫害防除事業の概要】

【実施概要】

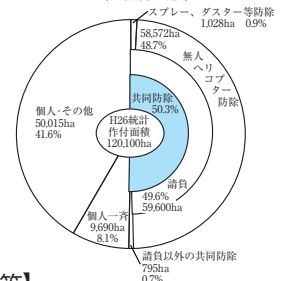
NOSAIと防除協議会が実施主体として行った水稻共同防除の延防除面積は67,459㌔で、昨年度に比べ1,650㌔増となりました。主な増加要因として、既に防除を実施している地域の面積拡大、新たな地域で防除を実施したことが挙げられます。

共同防除の延面積における方式別割合は、無人ヘリコプター防除が97.1%、ダスターやスプレー等による請負防除が1.7%となりました。(図1-1、図1-2)

(図1-1) 共同防除の防除方式別割合 (延防除面積)



(図1-2) 作付面積に対する防除方式割合 (実防除面積)



【無人ヘリコプター防除の安全対策】

無人ヘリコプターによる請負防除は実面積で58,572㌔、延面積で65,495㌔でした。

防除は7月下旬から始まり、8月上旬にピークを迎え、1日の最高稼働機体数は198機となりました。

本年度は、電線等との接触事故が7件発生しました。引き続き、事故防止・安全対策を最重要課題として安全対策の徹底を図り、無人ヘリコプター防除の実施に取り組む必要があります。

【剤型別防除実施面積】

剤型別での延防除面積は、液剤が65,323㌔ (全体の96.8%)、粒剤1,678㌔ (同2.5%)、粉剤458㌔ (同0.7%) となりました。

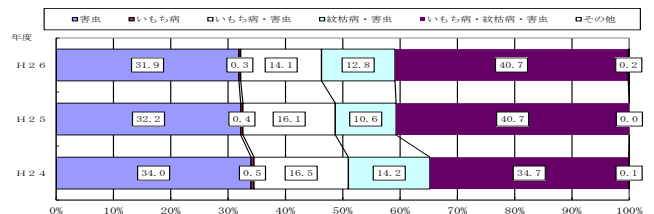
ポジティブリスト施行後、ダスター等による粉剤の防除面積が

大幅に減少し、液剤使用の無人ヘリコプターによる防除が中心となっています。

【病虫害別防除面積の割合】

病虫害別の延防除面積の割合は、いもち病・紋枯病・害虫の同時防除が40.7% (昨年度40.7%)、害虫の単独防除が31.9% (同32.2%)、いもち病・害虫の同時防除が14.1% (同16.1%) の順になっています。また、防除対象に害虫を含む防除面積の割合は99.5%、いもち病を含む割合は55.3%、紋枯病を含む割合は53.7%となっています。(図2)

(図2) 病虫害別の延防除面積割合



防除回数は、減々栽培等の面積が増加したこと、コシヒカリB1に対応した防除体系の定着や病虫害発生予察調査に基づく必要最小限の防除により、平均1.1回と大半の市町村 (地区) でカメムシ類の防除を主体とした1回防除が定着しています。

【水稻病虫害地域予察強化事業の概要】

【実施概要】

全体の調査員数は2人減少して1,114人となり、1市町村 (地区) の平均は18.6人 (昨年度18.3人) でした。そのうち農家調査員は4人減少の353人で、全体に占める割合は31.7% (前年32.0%) と年々減少しています。農家調査員の参画は、農家からの情報収集、病虫害発生予察調査の宣伝効果、農家との接点強化などの意義があり調査員数の確保のみにとどまりません。今後も参画への積極的な働きかけをお願いします。

県全体での延調査地点は14,007地点で、52㌔に1地点の割合で調査地点が設置されました。1市町村 (地区) 当たりの平均調査回数は5.8回となりました。(表1)

各市町村 (地区) では、予察調査結果を分析し、防除要否や防除時期等の判定を行いました。また、情報提供の手段は、チラシを中心に全農家に配布している地区が多く、他に、ホームページ・有線、掲示板等を活用し、調査結果等を掲示する取り組みを実施しています。

【終わりに】

売れる米づくりや環境保全型農業の推進を図るため、減々栽培等の面積が拡大し、病虫害防除を取り巻く環境が変化しています。今後も関係機関・団体等が連携し、地域の実情に合った防除が実施できますよう、一層のご尽力をお願いいたします。

(NOSAI新潟 川瀬 竜也)

表1 平成26年度水稻病虫害地域予察強化事業実績表

項 目	病害虫地域予察調査員の設置状況（実）								調査概要					1地点 当り面積
	市町村	J A	NOSAI	農業者	普及指導 センター	防除所	その他	計	平均 回数	平 均 地点数	延地点 数	延調査 員数	左の内 農業者	
組 合	人	人	人	人	人	人	人	人	回	点	点	人	人	
県 計	135	320	196	353	74	0	36	1,114	5.8	39.9	14,007	5,201	1,450	
1市町村平均	2.3	5.3	3.3	5.9	1.2	0	0.6	18.6	－	－	233.5	86.7	24.2	
前 年 実 績	143	311	198	357	76	0	31	1,116	5.7	40.2	14,284	5,308	1,443	
前年実績対比	△8	9	△2	△4	△2	0	5	△2	0.1	△0.3	△277	△107	7	

水稲の無人ヘリコプターによる共同防除の安全対策について

【共同防除の現状】

NOSA I 魚沼の水稲病虫害共同防除の体系は、平成11年4月の合併以降、大きく変わりました。

防除作業員の高齢化や兼業農家の増加、大区画圃場整備により、既存の体制維持が困難となり、防除班及び作業員数は減少傾向にありました。そのため共同防除の手段は、無人ヘリコプターによる共同防除の需要が高まり無人ヘリ防除へと移行してきました。

平成17年度、コシヒカリBLの一斉導入によって、魚沼の特徴的な病害であった「いもち病」による被害の心配が減り、殆どの地区で近年は害虫防除をメインとした1回防除が主流となりました。

現在、NOSA I 魚沼では組合所有の無人ヘリコプター14機、委託業者3社5機の合計19機と組合所属オペレーター69名の協力により、水稲の無人ヘリ共同防除を実施しています。しかし、1回防除になったことから、散布時期が集中し、天候不良の際はダイヤ変更等に苦慮しています。

平成26年度においては、7月19日から8月25日の間、実防除日数29日、延機体数262機で4611.2haの無人ヘリ共同防除を実施しましたが、好天気が続かず晴れ間を見ながらの作業となり、防除日程も2日遅れての終了となりました。また、出穂期には台風11号の影響を受け、南魚沼市を中心に白穂被害が発生し、減収または品質の低下が懸念されましたが、収穫後の数字を見ると、さほど大きな被害とならなかったようです。

【無人ヘリコプター防除の安全対策】

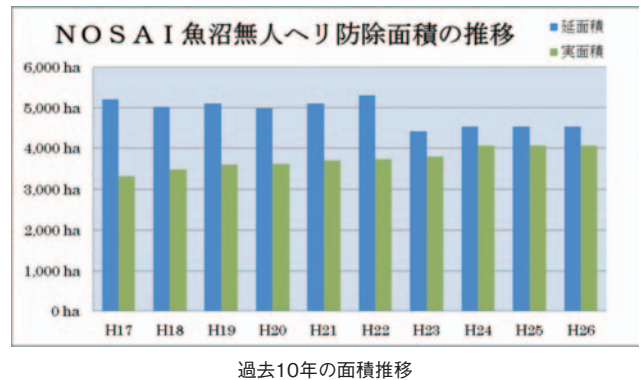
無人ヘリコプター防除を実施していく上で重要となってくるのが、安全対策です。事故の発生は病虫害防除に対する信頼を損なう恐れがあります。

そこでNOSA I 魚沼では毎年、農家オペレーターの指導的立場である職員オペレーターを対象に、新潟スカイテック（株）の協力を得て安全運航研修を実施し、技術の向上と安全対策の再認識に努めています。農家オペレーターに対しては、毎年6月上旬に魚沼産業用無人ヘリコプターオペレーター協議会（会員69名）主催の安全運航研修会をかわきりに、防除直前まで小千谷、南魚沼、中魚沼の3地区で毎週1回の練習会を開催し、オペレーターの技術向上と合図マンとの連携の強化を図り、安全運航に努めています。

また、散布にあたっては事前に防除地区の現地確認を実施し、散布地図に危険箇所を記入し、電柱の支線や除外圃場などには標識旗を設置しています。除外圃場や他作物など、ドリフトによる危険がある圃場などについては、各防除班により補正散布が実施されます。防除区域の周辺住民には、回覧文書を作成し、防除班長を通し危被害防止に努めています。

防除終了後には、オペレー

ター協議会会員が一堂に会し、防除実績検討会（無人ヘリコプターオペレーター協議会及びNOSA I 魚沼共催）を開催しています。そこでは、当年度の防除実績報告、県内の事故状況が報告されるほか、機体毎に備え付けている独自の飛行記録簿から、日毎の問題点・ヒヤリハット事項等を洗出し、次年度へ向けた検討を行っています。



【今後について】

現在当組合管内のオペレーターは、無人ヘリ導入当初からのオペレーターが多く、オペレーターの高齢化が進み、ここ数年でベテランが少しずつ抜けている状況です。オペレーターの新規養成を実施していますが、ベテランが抜けた穴を補うには大変な時間と労力がかかります。防除効率・品質が低下したと言われてはいけませんので、新人オペレーターの育成には先輩オペレーターの協力・本人の努力が必要です。また、職員オペレーターは指導的立場である必要性から、今年度は3名の職員が指導員資格を取得し、既に取得している2名を合わせ5名となりましたので、地域のオペレーターの技術の底上げができればと考えています。指導員となれば無人ヘリの操縦技術だけではなく、安全対策・防除環境への配慮等が必要となりますので、今後も一層の事故・危被害を未然に防ぐ対策を講じ、信頼性の高い無人ヘリ防除作業を行えるよう取り組んでいきたいと思ひます。

(NOSA I 魚沼 山田 大輔)

編集後記

- 3月14日北陸新幹線が長野から金沢まで延伸され、一番列車の出発式の様子がテレビに映し出されていました。今から十年前くらいには、2014年問題と称して北陸新幹線の開通により、上越新幹線が減便されたり、大宮駅始発になるなどと懸念され、県全体の活性化策などを真剣に議論したことなどが思い出されます。
- いがた植防だよりも今年度の仕上げとして発刊いたします。キウイフルーツかいう病Psa3系統やクモヘリカメムシ、マイマイガなどの話題を掲載いたしました。今まで余り表には出てこない問題ですが、地道な調査や侵入警戒対策が必要とされています。
- 先日新潟県病虫害研究会主催の「こしひかりBL導入10年を振り返る」と題したシンポジウムが開催されました。BL構成系統の変遷といもち病菌レースの推移や、現場の防除の動向、水稲病虫害の発生動向等多方面にわたり検討されました。
- 10年という期間は短いようですが、いろいろな変化が起きていることを感じさせられました。(事務局)



職員安全運航研修会



危険旗設置



オペレーター協議会安全運行研修